

res Mancipi ト res nec Mancipi

春木一郎



羅馬法ニ於テハ近世法ニ於ケルカ如ク不動産動産ノ區別ニ重ヲ置カス寧
 □ res Mancipi ト res nec Mancipi ノ區別ヲ重要視セリ res Mancipi 及ヒ res
 nec Mancipi ナル術語カ普ネク用ヒラルルニ至リタル以前ニ於テハ familia
 ハ res Mancipi ヲ示メシ pecunia ハ res nec Mancipi ヲ示メシタルモノノ如
 シ Plinius N. h, 21, 3, 7 ニ奴隸及ヒ馬ヲ pecunia 中ニ算入スト雖モ之ヲ以
 テ直チニ十二表法時代ノ用例ニ於テモ奴隸及ヒ馬ヲ pecunia 中ニ算入シ
 タルモノト斷言スル能ハス此等ノ物ヲ pecunia 中ニ含マシメタルハ寧口
 博物学者一家ノ私見ナリト謂フヘシ

1
(1045)

res Mancipi 及ヒ res nec Mancipi ノ實質上ノ區別ハ確証ナシト雖モ王制
 時代ヨリ存シタルモノト想像ス十二表法時代ニハ認メラレタルノ確証ア
 リ Gaius II, 47 ニ拋レハ宗族ノ後見ニ服スル婦女ノ res Mancipi ハ後見人ノ
 助成ヲ經テ引渡サレタルトキニ非サレハ時効ニ因リテ取得セラレス云々
 而シテ res Mancipi 及ヒ res nec Mancipi ナル名称モ亦當時ハ既ニ使用セラ
 レタルモノナラン此名称中ノ Mancipi ノ語尾ナル i ハ長音ニシテ第二格
 ノ古形ナリ又 res nec Mancipi ノ nec ハ furtum nec manifestum 若ハ十二表
 法ノ規定ナル cui suus heres nec escit etc. 中ノ nec ノ如ク non ノ古形ナル
 等ノ事實ヨリ推察スルニ此等ノ名称カ十二表法時代ニハ使用サレタルモ
 ノト云フモ可ナリト信ス

羅馬ノ法曹ハ res Mancipi 及ヒ res nec Mancipi ノ定義ヲ与ヘタルコト無
 シ只 res Mancipi ニ屬スル res ヲ列挙シタリ (Ulp. XIX, 1)

一 以太利ノ土地、農地タリト建築用地タリトヲ問ハス

二 以太利ノ土地ニ於ケル農的地役権例ヘハ徒步通行地役権、家畜通過地役権、大車通過地役権、引水地役権ノ如シ

三 奴隸及ヒ輓又ハ鞍ヲ以テ馴致シ得ヘキ四足動物即チ牛馬驢騾是ナリ
右二列記セル以外ノ res 八 res nec mancipi トス例ヘハ² 景地 但 ius Italicum
ヲ附与サレタル⁽¹⁰⁴⁶⁾ 景地ハ此限ニ在ラス 景地ニ於ケル一切ノ地役権金錢第三
号中二列記シタル以外ノ動物例ヘハ象駱駝ノ如シ象駱駝ハ馴致シ得ヘシ
ト雖モ古代ノ羅馬人是ヲ知ラサリシカ故ニ res mancipi 中ニ加ヘラレサリ
シモノナリピルルス王カ以太利ニ攻メ入りタルトキニ於テ羅馬ノ兵士ハ
王ノ戦列中ニ大象ノ在ルヲ見驚愕シタルノ事実ハ普通ノ羅馬史中ニ見ユ
res mancipi ノ目録中ニハ物ノミナラス権利アリ謂フニ羅馬人力 res man-
cipi 及ヒ res nec mancipi ノ區別ヲ認メタル時代ニ当リテハ地役ノ負担ヲ
承役地ノ一部ト觀察シタリシカ後ニハ地役権ヲ独立シテ res mancipi ノ一
トシテ目録中ニ顯ハルルニ至レルモノナラン

res mancipi ハ農業ニ重要ナル關係ヲ有スル res ナリ而シテ右ノ羅馬国
ハ農業国ナリ故ニ此等ノ res ノ処分ニハ mancipatio 又ハ in iure cessio ナル
ル公ケノ手續ヲ要シタリ res mancipi ノ所有者カ其引渡ヲ為スモ所有権移
轉ヲ生セス是ニ反シテ res nec mancipi ハ引渡ニ因リテ所有権移轉ヲ生ス
而シテ res nec mancipi ニハ mancipatio 適用セラルルコトヲ得ス是レウル
ピア ヌスカ mancipatio ヲ以テ res mancipi 特有ノ処分方法ナリト云ヒタル
³ ノ意義ナリ (Ulp. XIX, 3)
⁽¹⁰⁴⁷⁾

res mancipi ト res nec mancipi トノ區別ノ理由ニ關シテハ從來種々ノ見
解アリ或者ハ mancipium ナル語ノ原ニ因リテ戦時ノ採奪物ヲ res mancipi
ト云ヒタルナリトス蓋 mancipium ハ manu capere ナレハナリ此見解ハ res
mancipi ト mancipatio トノ關係ヲ明カニスル能ハス換言セハ何故 manci-
patione 八 res mancipi 特有ノ所有権処分ノ方法ナルカノ点ヲ明カニセス又或
者ハ Servius Tullius カ設ケタル戸口調査ノ制ヲ執行スルニ当リテ公ケノ
財産目録ニ登録セラルヘキ res ヲ以テ res mancipi ト為シ然ラサル res ヲ
res nec mancipi ト為シタルナリト然レトモ res mancipi ト res nec mancipi

ノ區別ハ或ハ Servius Tullius 以前ニ既ニ存在シタルカノ疑アルノミナラス Livius 39, 44 ニ拠レハ婦女ノ裝飾品衣類農具ノ如キモ亦公ケノ財産目錄ニ登録セラルヘキ物タリト雖モ res Mancipi ニ非ス

res Mancipi ト res nec Mancipi ノ區別ノ理由ニ關スル通説ハ農業ニ重要ナル關係ヲ有スル res ヲ res Mancipi ト為シ然ラサル res ヲ res nec Mancipi ト為スナリ此説モ亦欠点無キニ非ス農具ノ如キ何故ニ res Mancipi 中ニ算入セラレサリシカ然レトモ他ノ説ニ比スルニ此説ハ最モ穩当ナルカ故ニ予ハ今苟ラク通説ニ賛同ス

法学隆盛時代ノ以後ニ於テハ兩者ノ區別ハ漸次實用ヲ失シ遂ニユスチニアヌス帝八五三一年ノ勅令ヲ以テ此區別ヲ廢止シタリ (l. un, § 5C. 7. 31)

4
(1048)

5
(1049)

(「京都法学会雑誌」第 5 卷第 8 号)

res mancipi ⊢ res nec mancipi

著 者 春木一郎

発行日 平成 13 年 4 月 22 日 1.0 版

平成 14 年 7 月 22 日 1.1 版

平成 15 年 10 月 22 日 1.11 版

発行者 和田 徹

発行所 和田電子出版

底本 「京都法学会雑誌」第 5 巻第 8 号

京都法学会 明治 43 年 8 月

[作成備忘録]

- ・ 底本は縦書き、旧字体表記。
- ・ 底本著者名「教授 法学博士 春木一郎」。
- ・ 欄外に底本の頁を付記。